

川内神楽

Ⅱ 衣川区上河内 Ⅱ

衣川区の中心部から県道49号を南に進み、天河橋を渡った先の河内行政区に、川内神楽は伝承されている。

1772年頃、衣川村川内要害の利平氏が、一関市巖美町の政吉氏に師匠を依頼。農村青年の娯楽として、神社の豊年祭などに奉納したのが起源だといわれる。南部神楽系の三輪流で、日本神話を題材にした神事・祈禱のための「式舞（式神楽）」と、地域の伝説などを基にした「劇神楽」を合わせ、20演目を伝承する。

大正5年に平泉村戸河内、15年に前沢町白鳥神楽を指導するなど、大正末期、昭和初期に最盛を迎えた。その後、戦争などで断絶寸前となったが、昭和21年から地域の有志が絶やさず受け継ぎ、53年に旧衣川村の無形文化財に指定された。

現在、12代目一座の川内神楽保存会菅原宏代表が、伝統の式舞を守りながら劇神楽にも磨きを掛けている川内神楽。衣川最古の神楽の火は煌々と燃え続ける。

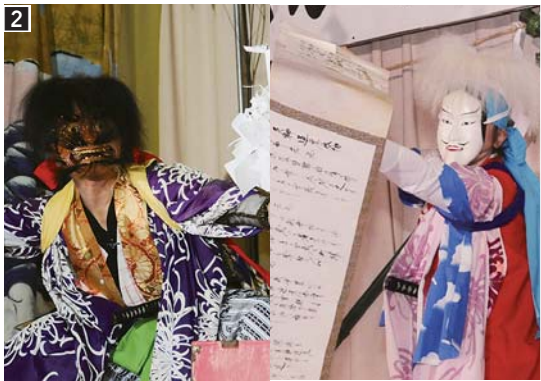
※川内神楽保存会が2演目を上演した「第26回ころもがわ神楽まつり」の記事は19ページ



1



2



1ころもがわ神楽まつりで演じられた「扇の的」。屋島の戦いで那須与一が平家方の小舟の上の的を射落とした平家物語の名場面を熱演 2牛若丸（右）が源氏の兵法書“多神通虎の巻物”を四国熊山城主の鬼一法眼（左）から取り戻す「宝蔵破り」。義経にまつわる演目は劇神楽でも人気だ

広告